

中国北京における大気汚染と社会情勢での体育的行事の実践

前在中華人民共和国日本国大使館附属北京日本人学校 教諭

群馬県吾妻郡中之条町立中之条小学校 教諭 唐 沢 和 之

キーワード：北京、大気汚染、社会情勢、反日デモ、体育的行事

1. はじめに

中国北京市は、政治問題や大気汚染問題など、日本との関係において多くの話題がある都市である。私が勤務した2012年から2015年は、尖閣諸島国有化問題において反日デモが起き、大気汚染問題で健康被害が懸念された。今回、ここでは中国北京の大気汚染問題と社会情勢の中で実践してきた体育的行事の対策についての実践を紹介させて頂きたい。

2. 北京日本人学校の大気汚染対策

近年、中国北京では大気汚染が特に深刻になっている。北京では、ようやく政府による環境対策や環境保護による対策が行われ始めたが、それでもなお課題は多く、改善はされていない。北京日本人学校では体育的行事をはじめ校外学習や屋外活動、教室環境についてまでも配慮する必要があった。大気汚染対策は、最重要課題となっていた。2013年度は、前年度よりも目に見えて大気が悪い日が多くなり、年度途中から大気汚染指数基準値を厳しくした。大気汚染による屋外での運動制限の指数基準を、AQI (Air Quality Index) 値300 (2012年度) からAQI 値150 (2014年度) に変更することとなった。

また、2013年度には北京日本人学校でも大気汚染対策が急速に進み、玄関のエアーカーテン、廊下の大型空気清浄機、体育館の空気清浄機、教室に空気清浄機が各2台ずつ設置された。その結果、校内の汚染指数は正常値まで下げることができ、安全を保つことができた。

大気汚染は、普段の生活にも体育授業にも大きく影響してくることから、健康面や体力づくりには苦慮した。運動会や体育的行事、校外学習には常に大気汚染指数を確認しながら行わなければならなかった。まず大事なことは、健康と安全である。実施できる場合と中止の場合を常に考えながら日々計画を作った。

大気汚染による症状は数日や数ヶ月で現れず、数十年後に現れるという報告があるため、何十年も先を見据え、責任をもって万全の安全対策で臨まなくてはならなかった。保護者への連絡、報道機関への対応など、対外的な説明も必要になっていた。中国環境局の指標や、在中国日本大使館、日本の環境省のデータや基準値の資料を集め、世界に例のない学校教育の大気汚染対策のフロンティアになり、独自の基準値を模索した。

3. 運動会と社会情勢

(1) 反日デモに影響された運動会

私が赴任した2012年度の運動会練習は、全校種目や応援合戦など例年通り1学期から準備が進められていた。しかし、夏休み中に尖閣諸島問題で状況が一変した。北京では、日本大使館前で中国人による尖閣諸島問題に抗議する大規模なデモが、満州事変(柳条湖事件)に合わせて行われたり、日常生活では日本人がタクシーに乗車拒否をされたりするなど、生活に支障をきたしていた。日本大使館からも注意喚起が出され、学校も休校措置をとらざるを得なかった。このような状況の中で、日本人が集まって運動会を行うことは安全上問題があると考えられた。運動会で音楽を流し、大きな声を出すことは悪影響を及ぼしかねない状況だった。結局、運動会が開催されないという事態が起きてしまった。その後、どうにか運動会を実施できないかと案を練った。騒動が一段落した頃、表現運動のみの発表会を校内のみで行うこととした。安全を考慮し、保護者や観客を入場させない状況のもとで行うことにした。保護者や観客に表現運動を見せることができず、その他の種目も行うこともできな

かったが、校内での表現運動の発表会は無事に行われ、児童生徒たちは精一杯演技を行うことができた。

(2) 大気汚染対策と運動会

今までにない大きな出来事に驚いていた2012年度だった。そして2013年度、私は北京日本人学校の実際の運動会を見たことがないまま、運動会を体育部長として実行することとなり、責任と不安を抱える日々だった。前年度の反省から、満州事変（柳条湖事件）の日から開催日を1週間以上離して設定した。その結果、練習期間を1週間短くしなければならなかった。今まで通りの練習計画が使えなくなり、新しい練習計画を練り直す必要があった。準備段階から一昨年の反省を調べ直し、先生方の意見を集め、計画を立てることに力を注いだ。計画を再考したことで、1学期はスムーズに準備を進めることができた。

2学期に入り、今年度は政治的影響による運動会中止の心配が少ないと安心していましたが、それもつかの間だった。今度は大気汚染に悩まされることとなった。北京の大気汚染は、改善の様子が見られることはなかった。学校での大気汚染指数基準値は今まで、AQI値201以上（2013年度7月まで）を屋外運動活動の禁止としていたが、健康とさらなる安全を考え、AQI値150以上（2013年度8月から）に厳しく制限される決定がなされた。これによって、大気汚染による運動会当日の開催が危ぶまれるだけでなく、練習期間中も屋外やグラウンドでの練習が出来なくなることが予想された。それに加えて、雨が降らない気候であるはずの北京が、例年になくしとしと雨が降り続いた。このことから、今までにはなかった体育館の使用計画も急遽作ることとなった。35回の運動会の歴史をもちながら、近年これほどの変更をしなければならないことは、今まであったのだろうかと思わせるくらいの変更続きであった。

そして運動会当日、午前6時の天候判断ではAQI値137で、かろうじて基準値を下回った。運動会は予定通り盛大に開催され、児童生徒の元気な声がグラウンドいっぱい響き渡った。運動会開始直後は、基準値ぎりぎりだった大気汚染指数が気になっていたが、児童生徒たちの声が風を呼んだのか、青空が広がり、児童生徒はもちろん、教員も真っ黒に日焼けをするほどの快晴だった。真剣な顔で走り抜ける徒競走、楽しく頑張った親子競技、音楽に合わせて演技した表現運動等々が行われた。全校競技の大縄跳び「∞ノコジャンピオン」は、小学部1年生から中学部3年生までが心一つにして、助け合いながら競技に取り組むことができた。そして、全員が全力を注いだ応援合戦は力強さとユーモア溢れる応援となった。喜びや悔しさ、笑顔や涙を体いっぱいに表現し、たくさんの思いが詰まった運動会になった。そこには、とどまることを知らない千変万化する子どもたちの成長を垣間見ることができた。



運動会全校練習



大縄跳び「∞ノコジャンピオン」

(3) まとめ

計画を再編しなければならなかったことが多かったが、無事に運動会を終えることができ、大きな達成感を得ることが出来た。体育部長として運動会をリードしてきたという自負と、成功させるという責任を果たしたという思いだった。しかし、この運動会成功を通して、より強く学んだことがある。それは、職員の協力と実行があり、

児童生徒への指導があってこそ成功したものである、ということだ。さらに、管理職や教務主任を通して対外的な交渉が行われており、父母会や北京日本人会の協力があつた。日本と中国の政治的特殊な事情により、中国当局の公安部との折衝があることも知つた。私の見えないところや知らないところで、たくさんの人の協力があり、行動があることを改めて身をもって経験した。この運動会の成功は、体育部長の成果ではないということだ。おごり高ぶってはならない、常に感謝の気持ちを持ち、表しながら職務を遂行する事が大切であると改めて考えさせられた。

4. スケート体験活動と大気汚染対策

(1) スケート体験の計画と安全管理

北京日本人学校では、1月にスケート体験が行われる。自然の湖上にはった氷の上で、児童生徒がスケートを行う。スケート体験は、屋外運動であるので北京の大気汚染の深刻化に影響され、伝統ある体育的行事の存続が危ぶまれていた。特色ある教育活動のひとつとして「地域の特性を生かした」体力づくりは、どうしても残したいと考えていた。児童生徒が喜び、貴重な体験ができるように、職員一同が協力し合つて計画を推し進めた。大気汚染の影響により、スケート授業に十分な時間確保ができないため、今までの「スケート学習」から、「スケート体験」という形で取り組むこととした。2週間の実施期間のなかで、各学年最低1回の実施ができるように時間割を組んだ。そして、実施できない学年が無いように、2週目の計画は未実施の学年が優先的に予定を組めるように配慮していた。スケート体験期間中の2週間は、毎日の天気と大気汚染指数を1時間ごとに情報を得て、実施と中止の判断を気にしていた。また、1日ごとに先の予定変更を考えながらの実施だった。

(2) スケート体験の実施

スケート体験期間以前から、大気汚染の対応に毎日追われていた。大気汚染指数(AQI)を調べ、安全管理を徹底した。天候と大気に恵まれるようにと祈るばかりだった。スケート体験を迎えた日、児童生徒はとても嬉しそうだった。初めて経験する児童生徒も経験がある児童生徒も、自分の目標をもって生き生きと楽しく取り組むことができた。自然のリンクにのつて「すごいね!」「凍っているよ!!」と感動の声もたくさん聞こえてきた。初めての経験で、一人で立つことが難しかった児童生徒もみるみると上達した。児童生徒の喜びの表情を見て、氷の上で風を感じる喜びや楽しさを十分に体験させることができたと感じ、嬉しく思った。

(3) まとめ

自然のスケートリンクで行うスケートは、冷帯に属する北京の気候に応じた、北京日本人学校の特色ある教育活動の1つだ。大気汚染の悪化により、「学習」から「体験」に変わり、実施回数が少なくなったことはとても残念である。しかし、スケートの楽しさを味わう機会を続けられたことを喜ばしく感じた。油断できない日が続いたが、スケート体験は、ほぼ予定通り無事に実施することができた。

5. 体力づくり運動

(1) 体力づくり運動の必要性

北京日本人学校では、体力の低下が懸念されていた。中国においては、私たちは外国人であるという特性上、外遊びが自由にできないことから体力が低下。また、大気汚染のため外で運動が思い切りできない状況だった。体力づくりについて、対策をとることとした。体育授業では、体育館でも行える体力づくりの方法を考え、屋内でできる体力づくり運動や、柔軟性を高める運動に特化した方法を提案した。

(2) 体力づくり運動の計画

そこで、年間を通して体力づくりを行うことを提案した。既存の年3回の体力づくり週間を継続しつつ、それ

に加えて、体育授業の中で準備運動の後に体力づくりメニューを入れた。名前は「加油（ジャーヨー）タイム」とした。中国語で「頑張る」という意味の「加油」を使った。

(3) 方法

①体力づくり週間について

学期に1回、体力づくり週間を行った。体力づくり週間はそれぞれ約2週間。学期ごとに重点テーマを決めて行った。1学期は柔軟性、2学期は筋力・投力、3学期は巧緻性・平衡性・協応性である。また、それに合わせて、運動集会で代表者がステージ上での発表も行った。

②体育授業での体力づくり

2014年度から取り組みを始めた。毎時間の体育授業の始まりに「加油（ジャーヨー）タイム」と名付けて、体力の向上を図った。前期は、時間走等を行った。低学年は1～2分間走、中学年は3～4分間走、高学年は4～5分間走、中学生はラダートレーニングを行った。後期は、縄跳び運動を行った。低学年は1分間、中学年は2分間、高学年は3分間と時間を決め、その時間内は跳び続けることとした。

(4) まとめ

体力づくりは、北京の大気汚染や生活環境によって影響を受けやすい状態にある。しかし、方法を変え、室内での運動や柔軟性などの方法に特化した形で体力を付けることも考えられる。継続的に運動を続けていくことが体力づくりには必要である。

6. まとめ

(1) 体育的行事の実践を振り返って

大気汚染や社会情勢により変革を求められたが、多種多様な場合に備え、様々な状況に対応した方法を考えながら取り組むことができた。これは、職員同士の細かい相談と、密接な協力により成し遂げられたものだ。日本国内の様々な地域からきている職員は、幅広い知識や寛容な対応を持ち合わせていた。自分が常識と感じていることが、必ずしも常識ではないことがあった。そのため、丁寧な話し合いや対応が必要になり、自分の立場や考えを明確にもちながら、職務にあたる必要があった。その中から新しい発想やアイデアが生まれ、質の高い実践が行われると感じた。厳しい環境の中で耐え抜き、自分を鍛えている。また、運動会などの全校行事を遂行するためには、職員会議資料での周知とともに、職員一人ひとりに役割を伝えたり、チェックをしたりすることが、成功への鍵となることを学んだ。細かい計画や、担当者への連絡・相談は最重要事項だ。手を抜かず、細かいところまで丁寧に、気づいたら行動することが必要だと感じた。

(2) お礼にかえて

2012年から2015年の3年間の北京日本人学校での勤務を終えた。関係各所の皆様には、北京に赴任してから大変お世話になった。学校内では、日本各地から集まった教員と協力し合い、時には競い合い、切磋琢磨しながら職務に励むことができた。対外的な面では、現地日本企業の人や中国の方など、たくさんの人との出会いが私を変化させてくれた。反日デモや大気汚染対策など、決して安心できた3年間ではなかったが、厳しい環境の中で仕事を行ったことで、自己を鍛えることができたのではないかと感じている。

最後に、北京での3年間を無事に終わられたことと、充実した職務の実行ができたのは、ひとえに関わってくださった皆様のおかげであり、心から感謝を申し上げたい。また、この大きな経験を生かし、これからも真面目に誠実に職務に励みたい。